

溪流釣りを長く楽しむには

当別町一番川地区でのアンケート調査の結果から

佐藤 孝弘

はじめに

魚の生息環境を見直し、豊かな自然に恵まれた河川を取り戻そうという動きが顕在化している。

森林利用施設の中には、森林だけでなく河川も利用対象として提供するために、「森林+何川」というロケーションを活用したものもあり、このような類の施設は、利用者の河川とのふれあいの機会を増やす上で大きな貢献をしている。

ところで、河川の構成要素である魚の生息状況を左右する要因としては、河川の自然環境の良否のほかに釣りによる影響が考えられる。資源量の少ない溪流釣りを持続的に進めるには、河川環境の保全、魚資源の管理・増殖、釣りのルールづくりが必要になる。しかし、釣りに関する調査の難しさなどから、河川での釣りの実態把握や生息する魚への影響についての調査・研究はあまり進められていないのが実状である。

以上の理由からここでは、溪流釣りを森林レクリエーションの一端（分野）としてとらえ、これを持続的に進める方策を検討するために、1998年に筆者らが実施した釣り人を対象としたアンケート調査の結果を報告し、そこから得られた結果をもとに森林レクリエーションとしての溪流釣りに関する調査・研究の方向性について検討したい。

なお、アンケート調査は当別町の一番川流域で実施し、79の回答を得た（図-1）。この流域では、溪流釣りを楽しむため、民間団体によるヤマメ稚魚の放流が行われているほか、アメマス、ニジマス、ウグイ等も生息し、昔から溪流釣りが盛んに行われている。

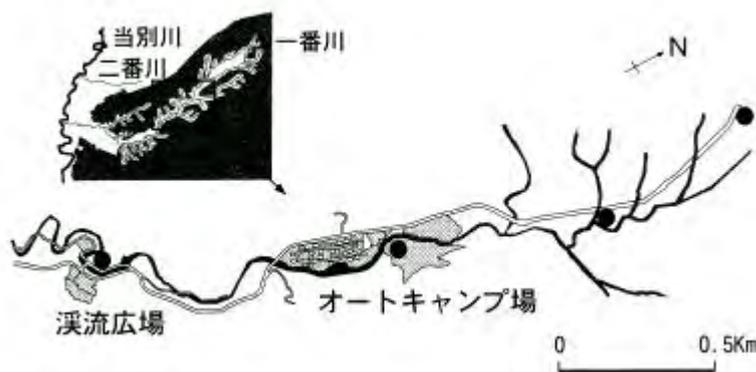


図-1 調査地の概要
アンケート調査の実施場所

アンケート調査の結果

釣果ではヤマメが多い

釣り人に釣果について尋ねた結果を表-1に示す。全回答者のうち何らかの釣果があったのは全体の77.2%で、数（平均）ではヤマメ18.8尾、ニジマス11.0

表-1 釣果のあった回答者の申告

魚種	釣れた人の 比率 (%)	釣れた数（一人当たり）		魚の大きさ	
		平均（尾）	最多（尾）	平均（cm）	最大（cm）
ヤマメ	82.0	18.8	154	10.0	42.0
ニジマス	9.8	11.0	53	17.5	54.0
アメマス	6.6	8.8	31	17.0	21.0
カジカ	16.4	1.6	3	12.5	17.0
ウグイ	4.9	4.7	5	16.5	20.0
ドジョウ	3.3	0.5	1	10.5	15.0

尾、アメマス8.8尾であった。また、大きさはヤマメが平均10.0cm、最大42.0cm、ニジマス17.5cm、最大54.0cm、アメマス17.0cm、最大で21.0cmであった（ヤマメの最大は42.0cmとあるが、一番川

では親魚の遡上がないため大型化せず，ニジマスとの誤認の可能性がある。

回答者の約80%に釣果があったことから，この川は比較的釣りのしやすい状態にあると考えられる。特にヤマメは，一人当たり最多で154尾という回答もあり，最も多くの人たちが釣っていた。また，体長の平均値から当年魚が釣れていたと推測される。

魚は豊富か？

釣果への満足度を調べるため，魚の豊富さについて5段階（非常に豊富・豊富・ふつう・あまり豊富でない・全くいない）で評価してもらった。結果は「非常に豊富」「豊富」は全体の21.5%，「あまり豊富でない」「全くいない」が

46.8%で否定的評価が約半数を占めた。これは釣果を踏まえた評価であるから，釣れなかった人は否定的評価をすると予想されるが，全体の約80%が釣果ありと回答したことを考えると否定的評価の比率が高い。そこで，否定的評価をした人達の当初目標と釣果を比較したところ，理由として，a．釣れた魚の数が目標より少ない，b．魚種が違う，c．魚体が小さいの3点が挙げられ，魚の豊富さは釣れる魚の数のほかに魚種や大きさも関連していた（図-2）。

渓流の魚を増やすためには？

多くの河川の現状を考えると，魚が自然繁殖だけで一定数を維持し続けることは困難であり，人為的に魚を管理したり増殖させていかなければならない。こうした河川の魚資源の管理・増殖に対する釣り人の考えを明らかにするため「渓流の魚を増やすにはどのようなことが必要ですか。」と尋ねた（複数回答）（図-3）。

回答の中で最も多かったのは「定期的な稚魚の放流」（63.8%）であり，次いで，「持ち帰られる魚の体長制限」（37.5%），「持ち帰られる魚の数や種類の制限」（13.8%），「釣りを行える期間・区域の限定」（12.5%）となった。

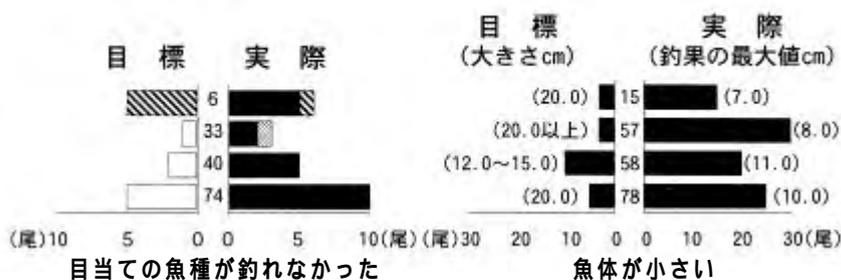
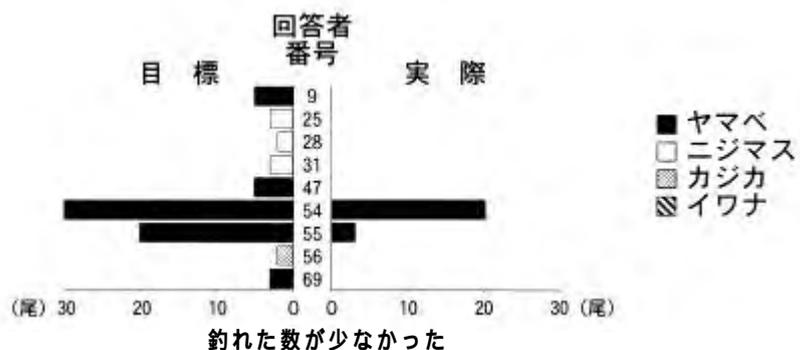


図-2 否定的評価をした回答者の目標と実際の釣果



図-3 渓流の魚の増殖についての意向 (%)

また、「何も必要ない」という回答は全体の 1.3%にとどまり、回答者の多くは魚の増殖に何らかの措置が必要と認識している。

また、費用負担については「必要を認め支払う」が 47.0%、「必要は認めるが払いたくない」が 11.1%で、支払いでは意見を異にするが、全体の 58.1%が費用負担の必要性についてはこれを是認する意向を示した。また、支払いに応じるか否かについては「必要を認め支払う」が 47.0%、「必要を認めないがやむなく支払う」が 6.2%となり、費用負担の必要性については意見を異にするが、全体の 53.2%が、支払いについてはこれに応じる意向を示した。さらに、支払いに応じる意向を示した人達に負担可能な金額を質問したところ、500円という回答が 35.7%と最も多く、次いで 1000円の 28.6%、300円の 14.3%となった。また、1500円、3000円という高額な回答や「年間で 3000円」というように費用負担の対象期間を書き添えている回答もみられた。

費用負担については全体の半数以上が一定の理解を示し、金額では 500～1000円という回答が多かった。今回は、回答数が少ないことや費用負担の対象となる期間（日単位、月単位等）が盛り込まれていない等、調査に改善の余地があり、さらに詳しく調べる必要がある。

今後の課題

河川環境が改善され、魚の生息が守られるならば、釣りについてのルールづくりが必要となる。せっかく環境が整えられても、そこで無秩序な釣りが行われたなら、費やした努力が水泡に帰することは明白だからである。従って、このような事態を回避するには、釣りという行為に一定の制限を加え、魚資源の持続可能な範囲で楽しんでもらうことになる。また、このような取り組みを効果あるものにするためには、訪れる人たちからのコンセンサスが必要となる。さらに、短期的には放流を中心とした魚資源の確保に努める一方で、長期的には自然繁殖が可能な河川づくりを目指す必要がある。これらの観点から、今後、森林レクリエーションとしての遊漁を持続的に進めるための方策づくりに必要な調査・研究の方向性を考察すると以下ようになる。

一番川ではヤマメを中心に一定の釣果が得られる状況が形成されているが、これは民間団体による放流事業の効果による。多くの河川がそうであるように、この流域も魚の降海・遡上が遮られているため、当面は、放流により魚の量的確保を図る必要がある。一方で、釣り人の評価にあったように、魚の豊富さを高めるには、量的確保と共に魚種を増やすことが重要であり、多様な魚種の放流（ニジマス・アメマス等）が必要となる。また、ニジマスは外来種であり、生態系の攪乱による在来種への影響が懸念されるが、これらについてはほとんど調査が進められていない。何川の生態系に配慮し、釣り人のニーズに応えていくには、多様な魚種の放流のための技術開発、生息場所や餌等をめぐる魚種間の影響の把握、適切な放流数把握のための調査・研究を進める必要がある。

前述した短期的な方向性と共に、長期的には自然繁殖が可能な河川づくりが必要となる。特に、多くの河川にみられる砂防ダムについては、魚道の整備により降海・遡上を可能にする取り組みが進められているが、その効果や改善点の検証結果をもとに、これら事業の推進を支援する必要がある。また、産卵場所や越冬場等の魚の生息環境の人為的造成の可否についての検討を進める必要がある。

訪れる人たちの釣りに対する考え方は多様であり、ルールづくりやコンセンサスには当該河川に関する情報収集と提供をしなければならない。例えば、アンケート調査で回答のあった体長・尾数・区域の制限や費用負担についてはこれを指示するだけでなく、その根拠が具体的に示される必要がある。これらの情報を整備するには、、 に掲げた調査・研究データの蓄積・整理と共に、訪れる人たちの釣りの実施状況や釣りによる魚の減少の実態把握が必要である。また、設定したルールを形骸化さ

せることなく運用するには、利用者への普及・啓蒙活動も必要であり、そのための方策の検討と実践による改善が求められる。

自然河川は森林と一体化しており、そこに棲む魚の生息状況は周辺の森林環境と密接につながっている。また、治山事業や森林レクリエーションへの取り組みからも明らかなように、林務行政が河川に関わる事業を進めなければならないケースも今後さらに増大することが予想される。筆者が今回提示したアンケート調査の分析結果からは、河川を取り巻く森林とそこに棲む魚、そしてそこを訪れる人について多面的な調査・研究を展開していく必要性が示唆される。

今回のアンケート調査は回答数が少なく、設定した質問にも改善の余地がある。筆者らは昨年度に引き続き、釣り人へのアンケート調査並びに釣り人の実態把握のための調査を継続している。これらの調査から得られたデータを検証し、森林レクリエーションとしての溪流釣りを取り巻く問題について考察を行っていきたい。

(保健機能科)